

## 2019年度 県立高校入試 国語 講評

思ったより得点できていない受験生が多かったのではないだろうか。難易度はやや難しいものといえる。昨年より設問数はやや減ったものの、時間配分はかなり厳しかったと思う。【問題一】は小問集合で、問一の漢字の正答率はやや低いと思われる。「貸す」、「成績」は意外に誤ることが多い漢字である。問四の和語も、偶然当たることもある解答だが、「中継」がポイントであった。【問題二】は文学的文章の読解問題で、問二の「おごそかな声の理由」を記述する問いが難しかったと思われる。【問題三】は説明的文章で、記号で答える問題が多く、文章自体がやや理解しづらいものであった。そのため、得点にかなり影響が出たのではないだろうか。【問題四】は古文からの出題で、標準的な問題だったといえる。【問題五】は文法と作文の問題で、「ら抜き言葉」に関するものであった。作文は、その資料を踏まえたうえ、さらに四字熟語を関連させるもので、熟語自体は標準的なものであったが、文をまとめるのにかなり手こずったのではないか。

## 2019年度 県立高校入試 数学 講評

大問数は6題構成。小問数は35問と昨年より微増であった。極端な難問は少なく、例年通り【問題1】小問集合、【問題2】以降は「資料の活用」、「確率」、「関数」、「連立方程式」からの出題であった。特筆すべき点は、証明問題、理由や解答の過程を問う記述形式の問題が4問と例年に比べ著しく増えた点である。このあたりの問題の処理、そして【問題1】の小問集合を速く正確に正解するかが高得点につながるかどうかの分かれ目になると考えられる。

また、難易度の高い問題としては、【問題1】問10の作図、【問題5】問3のグラフ、【問題6】問5の回転体の体積の問題が挙げられる。全体を通し情報量が多いので、短時間で問題を理解し、計算ミスをしないよう手際よく処理していく必要があるが、問題の難易度は全体的に標準で取り組みやすい問題が多かったので、平均点は例年並みになるのではないかと予想される。

## 2019年度 県立高校入試 社会 講評

社会入試問題は地理・歴史・公民の大問3つは変わらなかったが、解答箇所が40と例年より多かった(2017年は35題, 2018年は37題)。**【問題1】** グラフ・資料が多く使われており、雨温図・資源の輸入相手国・製造品出荷額の割合など、普段からそれぞれの特徴をおさえる学習が必要だった。また、地形図や対せき点など、日頃あまり学習しない分野からの出題があったので、全範囲もれなく勉強しておく必要があった。**【問題2】** 問1(4)は記述問題だったが、図を見て答える問題なので、記述練習をしていれば問題はなかった。問2(4)の並び替え問題は、年号を覚えるだけでなく、出来事の流れをおさえる学習をするよう心掛けておくことが必要だった。**【問題3】** 基本的な問題が多く、言葉の意味をしっかりと覚えていればできた。問3(3)の労働力人口比率のグラフを答える問題は、資料から女性の30～39歳の比率が下がっていることを読み取ればできた問題。来年受験生の皆さんは、全分野とも偏りなく学習を進めていくこと。さらに、グラフ・資料問題は必須なので、教科書・資料集には目を通しておく。また、記述問題も出題されるため、学習の際は常に理由等を確認しておくこと。

## 2019年度 県立高校入試 英語 講評

例年通り大問5題構成であった。設問や単語数、難易度も例年に似たもので、きちんと対策した受験生がきちんと点をとれるような問題であった。

**【問題1】** は、例年通りの聞き取りの問題であった。

**【問題2】** は、短い会話文の空欄に単語を補充するものと、並び替えであった。過去にも出題された「look for」などは気づきやすかった。一方、並び替えのNo.2は目的格関係代名詞の省略だと分かりにくかったのではないかと。語群にbe動詞と過去分詞があるので受け身と間違えやすい。

**【問題3】** は、会話の流れに合う文を書く問題と課題英作文であった。会話の流れとは言っても実際は空欄の前後(今回は二問とも疑問文を書くことが要求されたので、その後ろの答え方)を見れば書くべき内容はすぐに分かっただろう。課題英作文は「給食か弁当か」という身近なお題だったので書きやすかったと思われる。

**【問題4】** は、会話文の問題だった。今年もグラフが出されたが、複雑なものではなかった。唯一問4は、傍線の後ろを訳して終わりではなく、少しまとめて書かなければならぬのでやりにくく感じた生徒もいたことと思う。

**【問題5】** は長文であった。設問を見ると例年通りだが、本文自体が読みにくく感じたかも知れない。例えば問3を解く際に根拠となる一文の中だけでも、「need to」「be able to」「take care of」「by themselves」というような、多くの熟語が使っていた。基礎をしっかりと固めておかないと、本文のおおまかな内容を捉えるのが難しかったと思う。

2019年度 県立高校入試 理科 講評

大問数8題，小問数40問，うち計算問題6問，記述問題4問，化学反応式1問と例年通りの出題数であった。また，図示する問題は1問で，並列回路についての電圧と電流の関係を表すグラフをかくものであった。

【問題2】の鉄と硫黄の化合の実験や【問題5】の身近なもので電池をつくる実験など，ほとんどは教科書に載っている実験や観察に沿っての出題であった。

ただし，記述説明問題では，【問題5】問3のつくった電池のアルミニウムはくの表面に小さい穴がいくつもあいてボロボロになる理由，問5の太陽光発電が火力発電より環境への負荷が少ない理由など，詳しい理解が問われる問題もあった。

また，語句や選択問題でも【問題3】問4（2）の深成岩の種類，【問題4】問3（3）の浮力の性質，【問題7】問4の直列回路と並列回路での消費電力のちがいなど，分類や性質の理解を問う問題が目立った。

実験や観察の結果や考察を科学的に理解できていたかが，得点の分かれ目になったように思われる。平均点は昨年と同様に30点弱になると予想される。